

「絡子」

神田恭真

五年前、御師匠さんから授かった絡子には「袈裟是釈迦牟尼佛皮肉骨髓也」と裏書きされていました。当時、はじめて僧堂へ向かう私がこの言葉の心を見据えることはありませんでした。そして永平寺上山を迎えました。

力強い雪が命いっぱい降り積もる十二月、僧堂では多くの雲水が坐禅をしています。みんな同じことをしていますが競争ではありません。坐禅には比べるものがありません。この規則正しい生活はまるで韻を踏んでいるかの如く美しいと思います。殊に名譽や声望にしがみついたり、自分勝手に振る舞うことは道環の行持を絶つこととなります。私は志のある七人の仲間と上山しました。

出身地や境涯も違う八人が袖をすり合い参禅弁道する。偶然ではない、因縁によるささやかな出会いとして受け止めています。身と心から仏さまの教えを実践する仲間がいるとは何と有り難いことでしょうか。山門に立つと目の前に見事な聯がありました。「家庭敵峻、陸老の真門より入るを容さず」「鎖鑰放閑、遮莫善財の一步を進め来るに」小さい頃に見た永平寺の映像で老師が説明していた聯で

した。その雪深い中での淡々とした風景を今もはつきり覚えています。この聯は入門の第一関を提起していて、人を圧する重々しさがあります。柔軟さも感じさせる深い聯だと思えます。客行和尚さんの指導を受けて山門をくぐり、且過寮へ入りました。

毎日厳かな修行が続きます。古参和尚さんは行履を整える大切さを教えてくれました。持ち物を片づけたり、行状を見直すことは容易にできそうですが、怠けて道具を粗雑にし、大きな一日を虚しくする日もあります。以前大智禪師の『十二時法語』を拝読した折、このようなお示しがありました。「一日一夜をすこしも仏祖のおきてにたがわずして、行じもてゆき候えば、一年二年一生も、ただ一日一夜の規式にて候なり」仏祖の規範に反することなく、二十四時間行持を務める。それが一年二年一生を救う。御袈裟や応量器、日常の備品も法器として大事に扱い、行履を整えて振る舞うことを教えてくれました。また応量器はごまかしがきかない、嘘が通らないです。量に忠じて入れるので、自分の量以上を入れてもらい、お腹を痛くしたら、これは応量器に嘘をついたこととなります。頭鉢もお釈迦さまの頭と見たて、大切

に扱わなければいけません。心をこめて作った料理をいただいています。食べる側も作法を守り、姿勢を正して、感謝して食べたいものです。

行持の軸となる衆寮、修行僧や仏さまの御飯をつくる大庫院、お参りの皆さんに永平寺を御案内する伝道部など役目をいただき、今は後堂老師と単頭老師の下で務める後単行寮です。どこの寮舎へ行こうと高下勝負はありませんでした。それぞれ永平寺を支える重要な寮舎です。役割は違いますが、何れも身体を組み立てる成分のように大きい力をもっています。どこの寮舎へ行こうと、みな大役を果たす気持ちで役割に臨むことで、そこに一等の修行が現前します。

暮らしの中でちよつとした拍子に気になっていたことがひらめく時があります。御師匠さんの裏書は雨垂れが石を穿つ程、長い静かな間合いがありました。「幸いに御袈裟を身につけて仏さまの教えをいただいている。正に御袈裟は仏さまの皮肉骨髓。皮・肉・骨・髓、これら全て仏さまの教え、何れを得ても仏さまの大きな教えを得ているので、これを得たから勝れている、これを得たから劣っているという優り劣りはない。ただ御袈裟を身につけていることを幸せに思つて久修練行

しなさい」いつもかけている絡子を見ていて不意に浮かんだ私の解釈です。石を突き抜けた瞬間でした。この裏書きは私の一生涯のお示しです。

衣鉢を大切に持つことは当然ですが、諸の道具も法の器として丁寧に持つと自然と道具が本物になってきます。威儀を具して山門に立つた日、仲間からは見せかけでない、一切を受け入れる強さをもつ本物の仏心が見えました。また一年二年一生の根本があらわれた日であったと思います。

この仏心は持ち方による仏心です。道具を丁寧持つことで仏心があらわれたんです。御袈裟、応量器、僧堂、持ち方によつて虚しいものにもなります。言葉は時間も似ている所があるかもしれませんが。道元禪師の『観音導利興聖護国寺重雲堂式』に「のちをあわれみて、いまをおもくすべし」という骨身に沁みるお示しがあります。現在の弁道にこれか知らが凝縮されていると思つて、重恩に報いるつもりで臨むのか。このお示しを聞いた時から何度も考えています。ただ一年二年一生の根本が現在にあるのは明らかだと思つています。御袈裟を身につけていることを幸せに思つて、喜んで行持に臨みたい。 (新潟県広厳寺徒弟後単行兼瑞行平成二十六年春安居)